折鶴

泡坂妻夫

折鶴

泡坂妻夫

文藝春秋

折鶴

一九八八年三月十五日　第一刷

定価　一二〇〇円

著者　泡坂妻夫

発行者　西永達夫

発行所　株式会社　文藝春秋
〒一〇二　東京都千代田区紀尾井町三―二三

印刷　凸版印刷
製本　中島製本

万一乱丁落丁の場合はお取替えいたします

©Tsumao Awasaka 1988　Printed in Japan

ISBN 4-16-310170-5

目次

忍火山恋唄　5
駈落　99
角館にて　127
折鶴　157

装幀　粟屋　充

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.

折

鶴

忍火山恋唄

店の奥に古い紙の匂いが溜まっている。帳場の横がわずかに仄暗(ほのぐら)い。
脇田はしばらく店の中にいるうち、何か奇妙な懐かしさを感じていた。といって、これまで伊勢崎に来たことはなかったし、八城(やしろ)に案内されなかったらこんな町外れに古書店があるなどと思いもしなかっただろう。
充棟堂の主人は奥から数冊の和書を抱えて来て、八城の前に置いた。
「お尋ねのはこれだと思います」
八城はハンカチで手の汗を拭き、眼鏡を掛け直した。
どれもぼろ雑巾と間違えられそうな本だった。表紙はよれよれで、題簽(だいせん)の文字は剝げかかり、小口は真っ黒だった。八城は丁寧(ていねい)に古書のページを繰った。全てが染(そめ)模様の雛形(ひながた)だ。
「急に暑くなりました」
充棟堂はそう言って扇風機の首を調整した。
「さっき、三十度を越しましたよ。まだ、六月半ばでしょう。ニュースですとフェーン現象が起こっているそうです」

「前橋は盆地でしたね」
「……前橋？」
充棟堂は変な顔をした。脇田はつい思い出し笑いした。
「いや、今迄、前橋をうろうろしていたもんで」
「……前橋に、ご用があったんですか」
「前橋で降りて、ここを探し廻っていたんです」
「ここなら、伊勢崎ですがね」
「ですから、二人で降りる駅を間違えていたわけです」
「伊勢崎と、前橋と……ですか」
充棟堂はいくら間違えたくても間違えることなどできない、というように首を振り、改めて八城の方を見た。八城は今の話が耳に入ったらしい。本を見たまま唇を曲げたが、すぐ元の表情に戻った。
「そりゃ、どうも……残念なことで」
充棟堂は義理固く悔みを言った。
「でも、酒が入っていなくて、幸いでした」
「酒が入ると、どうなります」
「お互い、強情になるんです。まだ、前橋にいたでしょう」
充棟堂は三十代。色が白く鉤鼻で、帳場にいなければ古書などいじっているとは思えない。精力的な実業家といった型の男だった。
八城は充棟堂が持って来た数冊のうち、すぐ二冊を自分の膝元に引き寄せた。その二冊は買う

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.

ことに決めたようだが、別の本にもなお未練が残るようだった。
本には一冊ずつ白い帯が掛けられて、題名と値段が書き込まれている。八城が買うことにしたらしい『図式雛形模様大全』と『当世友禅ひなかた』の二冊だけで一月分の小遣いは軽く消えてしまいそうな値段だった。八城が残った本を前にして、なお悩んでいる気持がよく判る。
脇田は手持ち無沙汰になって、店内を見て廻った。
洋綴じの本は隅の方に申し訳程度に並んでいるだけで、ほとんどは和書だった。普通の古本屋なら、中央の島台にあたる場所がガラスケースで、その中には絵巻物、錦絵、古地図、短冊、絵葉書、引札などが雑然と並んでいる。店の隅にはどういうわけか古い薬研が一台転がっていた。
ケースの中には子供のころに見覚えのある、相撲の面子や富山の薬売が置いていった薬袋などがあり、珍しいとは思ったが今更それを買う気にもなれない。
狭い店だし、他の古書にはあまり興味がない。ざっと見て帳場に戻ろうとしたとき、本棚の平台に『青海波』という文字が目に入った。よく見ると、三、四十冊の薄い和書がビニールの紐で括られている。『青海波』はその一番上に重ねられていた。
「浄瑠璃の床本みたいだね」
と、脇田は充棟堂に訊いた。
「ええ。それは、全部床本です」
「新内のはあるかしら」
脇田は都外太夫が古い床本を蒐めているのを思い出した。
「新内はどうですか。自由にご覧になって下さい」
脇田は束をガラスケースの上に移し、紐を解いた。

ほとんどが清元の床本だったが、二冊だけ新内が混っていた。『里空夢夜桜』もう一冊が『道中膝栗毛』。表紙の汚い割に中の状態は悪くない。

一ページに五行、黒黒と書かれた変体仮名は、文字というより曲線が連なるデザインのようだ。語んじている新内の文句を手掛かりに目を通したが、簡単には読み下せない。

充棟堂に訊くと、都外太夫の土産として手頃な値段だった。脇田は二冊の床本を買うことにした。

「新内、お語りになるんですか」

と、充棟堂が訊いた。

「なに、語れば騒音公害だと言われる程度です」

八城が自分の膝元に引き寄せた本は三冊になった。それでも、八城はあとの何冊かを打ち返し打ち返し眺めている。充棟堂は床本を包装して脇田に手渡した。

「新内というと、昔、新内流しの幽霊に出会ったことがありましたよ」

「……幽霊の？」

「ええ。僕がまだ大学生でした。親父と一緒に、東北へ旅行したときのことです。ある旧家で蔵を整理したいと言って来たので、親父は仕事を覚えさせるために、僕を連れてその家に出掛けたんです。ちょうど、春休みだったけれども、北の方はまだ雪が残っていました」

充棟堂は話している間でも手を休ませない。帳面の横に積んである本を重ね直したり、机の上にある注文伝票を指で弾き返したりしている。

「その家には保存の良い本や文書が山ほどありましてね。親父の大仕事になったんですが、その帰り、田舎の温泉宿に泊ることになりました。遊山じゃありませんから、温泉の中でも一番小さ

な家で、襖一つ向こうが隣部屋というような旅人宿がまだ残っていたんですね。夜になってからその宿に着きまして、山菜に干物という食事。親父は飲る口でしたから三本ほど徳利を並べて、すぐ寝てしまう。僕の方はそう早くは寝られません。床の中で本かなんか読んでいると、流しが聞こえて来ました」

充棟堂はボウルペンを持ち、それで拍子を取るように指先で動かした。

「映画やテレビ劇では流しは見ているんですが、生の三味線は聞いたことがありませんから、二丁がゆったりと絡みあう旋律を聞きながら、ああ、いい音色だなと思っているうち、どこかの客が注文したようで、流しは前弾きに変って、新内屋は一齣を語り始めました。今迄、聞いたことがないので、何という曲か判らない。その上、新内は長く節を伸ばすでしょう」

脇田はうなずいた。新内は間拍子を無視することがある。そうした曲では踊ることがむずかしいから、発生期から歌舞伎とはあまり縁がなかった。

「流しは二人連れのようで、語っているのは男でした。今、思い返すと、声量のある方じゃないんですが、節が精妙で何とも言えない調子が心の中に突き刺さってくるよう。三味線の間に掛け声を入れるのが女の声で、張りのある瑞瑞しい声です。曲は総体にひどく遊蕩的なんですが、魂の悲鳴みたいなものも感じられる。思わず聞き惚れまして、僕がいた部屋は二階、新内屋はちょうどその窓の下あたりで演奏しているんですが、金縛りにあったような感じになって、窓を開けてみようとする気も起こりません。もし、二人の姿を見ていたら、後の怖さも少なかったかも知れなかったんですがね」

「……その二人が、幽霊だったのですか」

「翌朝、それが判ったんですよ。しばらくすると曲が終って、新内屋は元の流しを弾きながら、

ゆっくりと宿の前を去って行く様子。三味線の音が宿の玄関を背にして、真っすぐ向こうの方へ消えて行きました。僕はその流しが聞こえなくなるとすぐ寝入ったようなんですが、朝になって、部屋の窓を開けて見て、びっくりしてしまいました」

充棟堂はボウルペンを机の上にきちんと置いて言葉を継いだ。

「宿に着いたときは夜だったので、あたりの様子が判りませんでしたが、朝になって見ると玄関の前は横に一本の道があるだけで、その向こうは深い崖になっていたんです」

「……崖に？」

「ええ。鋭く切り立った谷間で登山道具などなければ、とても降りられるような場所じゃありません。僕がその光景を見て、ぞっとしたというのは、昨夜の新内流しを思い出したからで、その二人は空中に浮いてその谷間を向こうに渡って行った、としか考えられないからです。このことを親父に話すと、そんなばかなと言うだけで相手にしてくれない。しかし、夢を見ていたのだとすると、耳に残っている哀切な曲が生生しすぎる。宿の女中さんに訊くと、さあ、ここの温泉に流しの芸人が来たことは一度もないと言う。……これだけの話なんですがね」

「それで、幽霊の？」

「そう。あれは生きている者の仕業ではない。僕は昔から人魂などもよく見る方でしてね。お袋が死んだときには、東京に勤めていた僕の夢枕に立ってくれたものですよ」

言いながら、充棟堂はまだ本をひねくり廻している八城の方を見た。衝動買いの脇田とは違い、蒐集家の心理をちゃんと見抜いているようだった。充棟堂は無駄話をしながらそのきっかけを待っていたようだ。

「もし、何でしたら、月賦ということでもよろしいのですよ」

八城はほっとしたように全ての書物を揃えた。
「そうしてもらえると助かります。じゃ、この六冊、全部頂きましょう」
「じゃ、今、伝票を書きます。ええと……八城様でしたね」
充棟堂は電話の横にあるメモを見て、八城の名を確かめ、部厚な帳簿を繰った。
「東京の、友禅差しの模様師さん」
「ええ」
「結構ですね。綺麗なお仕事だ」
「結構なものですか。職人は儲けというものが一つもない」
「が、お固い。固いお客様が何よりです」
充棟堂は横書きの伝票をほとんど縦に置き、右腕をねじ曲げて下から上へといった感じで文字を書いていった。それを覗きながら、八城は幸せと不安が入り混った顔をした。
普通の人間なら、一度仕事から離れれば、なるべく仕事のことは忘れるように努めるだろう。だが、八城は少し変っている。仕事が終ると、古い時代の模様を探究する。どの時代、どんな模様が流行したか。それが、どんな形で現在にまで継承されて来たかがはっきりしないと、自分で模様を描いていても落着かないのだと言う。
だから、模様についての知識は深い。いつか、日本独自のものと思っていた、巴(ともえ)や亀甲(きっこう)といった原形が古代ユーラシア地方でさまざまに展開されていると聞かされ、驚いたことがある。しかし、同業者のほとんどはそれ以上の関心を示さない。先祖がややこしい模様を作り出したため、俺達もややこしい仕事をしなければならなくなった、というのが一般職人の感想だ。
脇田は親同士が友達だったので、八城とは小さいときから付き合っている。性格はかなり違う

のだが、結構うまが合う。今度も付き合ってくれと言うので、柄にもない古書店の客となったのだ。

外は一段と蒸し暑くなっている。気のせいか、八城の足取りが軽い。

「古本て、高いね」

と、脇田が言った。

「そう。高いと言えば高い。古い紙だからね。しかし、安いと言えば、安い」

「あれで、安いのかね」

「考えてもごらんよ。今、買った一冊が安政年間のもの。ざっと、百三十年も前だよ。その間、何度地震や火事があったか判らない。その間の保管料と思えば安い。そんな時代のものが、残っているだけでも奇跡に近い」

「奇跡も買うわけか」

「まあね。だから、嬶(かか)あには喋るなよ」

「そうだろうな。奇跡なんか買ったら、怒るだろうな」

「最近、めきめき強くなってね」

「しかし、強いくらいの方がいいよ」

「……そう言えば、お前の神さんの工合はどうだね」

「相変らずだ。ずっとぶらぶらしてる」

「……そうかい。お前のとこも、大変だな」

お客さん、お客さんという声が追って来た。脇田は自分のことではないと思い、歩みを止めずにいると、声は最後に「弥次喜多のお客さん」と呼んだ。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.